

在宅医療連携拠点事業成果報告

拠点事業者名： 一般社団法人 京都府歯科医師会

1 地域の在宅医療・介護が抱える課題と拠点の取り組み方針について

京都府内における在宅診療においては、多職種連携が推進されているが、高齢者の低栄養、サルコペニア、易感染性、誤嚥性肺炎、褥創にみられるように、「口腔」「食」に関しては、十分な連携は取られていない。また、退院時カンファレンス、連携パスが推進されているが、在宅復帰後の誤嚥性肺炎の再発等、病院と在宅間の連携は十分に進んでいない。また、在宅に関わる管理栄養士、リハビリテーション職種が少なく、介護者、訪問介護と栄養士、リハビリテーション職種の間には大きなコミュニケーション・ギャップが存在しており、シームレスな連携と地域NSTが確立されていないのが現状である。

これらの現状を鑑み、今回の委託事業として「タッチパネル」・「画像」・「音声」・「動画」といったiPadの特性を利用し、生活情報を中心とした情報共有システムを構築し、在宅療養者の「口腔と食」の日常像と課題を多職種間で共有する方式を検討した。これは、在宅での管理栄養士やリハビリテーション職種の参加を促し、訪問介護と訪問診療、病院のNSTと在宅療養の間にあるギャップを埋め、「食ること」（摂食・咀嚼・嚥下、呼吸・発声・発音、栄養管理、食形態、姿勢、食環境・居住環境、食事内容、献立、生活リズム、行事食・行事参加）から、在宅療養者の日常全般をサポートし、QOLの向上を目指すものである。

2 拠点事業の立ち上げについて

今回の委託事業を進めるにおいては、京都府歯科医師会として、介護支援専門員の資格を持つ歯科衛生士を非常勤として1名（勤務時間：週5日午前9時より午後5時）を半年間雇用した。これは、iPadによる「食べるサポート」在宅多職種連携システムのキーステーションである京都府歯科医師会口腔保健センターにケアマネジャー資格を持つ担当歯科衛生士を配置し、情報管理、当事者間の調整、アプリケーション開発業者と共にWeb上のネットワークを管理することを検討し、同口腔保健センターの地域保健連絡網である「口腔サポートセンターネットワーク」と多職種との連携を調整して、インターネットを利用した開かれた連携と円滑な運営に従事することと

した。

また、今回の在宅医療連携拠点事業については介護支援専門員の資格を持つ看護師、社会福祉士を雇用する条件付けがあったが、京都府内において公募してもフリーランスはおられない現状であったので、事業を運営するために非常勤としての看護師、社会福祉士を雇用することとなった。

京都府歯科医師会は、在宅医療連携拠点事業を推進するために、「平成24年度在宅医療連携拠点事業プロジェクトチーム会議」を設け、その委員には京都府歯科医師会側から、役員、公衆衛生部委員、看護師、社会福祉士、歯科衛生士、事務局、アプリ開発会社があたり、他職種側からは、主に今回の委託事業モデル地区内の介護支援専門員、リハビリテーション職、薬剤師、管理栄養士（訪問・地域、病棟）、歯科衛生士、看護師（訪問・地域、病棟）、病院勤務医師等、総勢23名で組織し、事業の運営と推進にご助力をいただいた。

3 拠点事業での取り組みについて

(1)地域の医療・福祉資源の把握及び活用

今回は、京都府健康福祉部医療課の協力を得て、地域資源の基礎的な調査を行った。今後は、モデル事業の実施地域において活用を検討している。

(2)会議の開催（地域ケア会議等への医療関係者の参加の仲介を含む。）

前記2に記載した「平成24年度在宅医療連携拠点事業プロジェクトチーム会議」並びに「拠点事業プロジェクトチーム小委員会」により、拠点事業の運営等に携わった。また、京都府が開催している平成24年度在宅医療連携拠点事業に関する「多職種協働による在宅チーム医療を担う人材育成事業」打合せ会議に、歯科医師会からも参画し、都道府県リーダー養成に関わる地域リーダー研修を実施することができた。

平成25年度の京都府の在宅医療推進事業への展開として、京都地域包括ケア推進機構と京都府医師会により、京都府内の地区医師会と市町村を中心とした在宅の多職種協働と共に、地域ケア会議の活用を推進していくことになった。

(3)研修の実施

今回の在宅医療連携拠点事業を推進するために、多職種医療関係者に対して開発したアプリを iPad によって操作する研修会「iPad 在宅連携研修会」を開催し、またモデル地区ごとに歯科関係者を対象とした「モデル事業キーパーソン養成研修会」を開催した。

また、下記の(4)-(7)に記載しているように、地区歯科医師会において地域の専門職や住民向けの口腔ケア研修会を実施した。

(4)24時間365日の在宅医療・介護提供体制の構築

①24時間対応の在宅医療提供体制を構築するための取り組み

歯科の立場から、直接的な24時間対応の在宅医療提供体制の構築の取り組みについてはまだ不十分であるが、京都地域包括ケア推進機構の事業に積極的に参画し、京都府下における「口腔サポートセンター」ネットワークの構築を進める等、地域連携推進の中で体制づくりの構築を進めている。

②当事業を通じて24時間対応するための体制の構築への取り組み

今回開発した iPad による「きょうのごはん録(ログ)」は、ネット上に置く「電子在宅療養手帳」でもあり、24時間の対応にも適している。また、地区歯科医師会の地域連携窓口である「口腔サポートセンター」が、平成24年度在宅医療連携拠点事業における高齢者家族や介助者からの訪問歯科診療等の依頼に対して、歯科医院を探す等の地域機能の充実を図るように進めている。今後、診療所や訪問看護ステーションとも連携し、24時間の情報提供にも対応できるような連携を進めていきたい。

(5)地域包括支援センター・ケアマネジャーを対象にした支援の実施

平成24年度在宅医療連携拠点事業プロジェクトチーム委員会に参加した地域包括支援センターに在籍する職員より、通所施設において iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」を活用したいとの提言もある。今後は地区歯科医師会の地域連携窓口である「口腔サポートセンター」と地域包括支援センターとが連携し、iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」の使用拡大を検討している。

(6)効率的な情報共有のための取り組み(地域連携パスの作成の取り組み、地域の在宅医療・介護関

係者の連絡様式・方法の統一など)

京都・滋賀のNST関係者の有志の団体である「京滋摂食・嚥下を考える会」が中心に作成された「摂食・嚥下連絡票」(監修:京滋NST研究会、京滋摂食・嚥下を考える会、後援:京都府医師会地域ケア委員会 食べることを考える小委員会)の普及・啓発に協力している。

また、今回のアプリ iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」は、在宅において、この「摂食・嚥下連絡票」を補完する目的で開発した。

(7)地域住民への普及・啓発

京都地域包括ケア推進機構の交付金事業により、地区歯科医師会の「口腔サポートセンター」と病院の地域連携室との連携強化や、地区「口腔サポートセンター」による住民向けの研修会を実施した。

(8)災害発生時の対応策

歯科の立場からは、災害発生時の対応策の構築への取り組みはまだ不十分であるが、京都府防災会議及び国民保護協議会に参画しており、大規模災害時の口腔ケアや歯科医療提供システム、更に大規模災害コーディネーターの育成を推進していかなければならない。

また、京都府口腔保健支援センターのもと、災害時における在宅現場における歯科医療提供体制確立のため、京都府下での「口腔サポートセンター」ネットワークの構築を地域連携推進の中で進めている。

4 特に独創的だと思う取り組み

今回の委託事業で開発したアプリ iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」は、在宅療養高齢者の自宅に iPad を設置し、ご本人・介護するご家族と介護者・多職種医療関係者が生活情報を共有し、「食」や「口腔」に関する電子版在宅療養手帳として活用するものである。

在宅高齢者のリハビリテーション ICF 課題の改善・QOL 向上を目的として、今回の「在宅医療連携拠点事業プロジェクトチーム」における多職種側委員の提言や助言を受け、アプリやシステムの開発を行い、モデル地区(山科区・南区・京都府福知市)の患家で試用した。

特に、動画・画像による多職種医療関係者間の伝達機能と、介護者を含めたタイムラインによる生活情報の共有は、本事業の独創的な取り組みであると考えている。

5 地域の在宅医療・介護連携に最も効果があった取り組み

短期間のモデル事業ではあったが、患者ご本人やご家族の日々の発信を中心に、在宅医療チームとの関係性の再構築がなされ、病院担当医・NSTと在宅チームとの連携も、より強固なものとなったように思われる。また今まで「パス」や「サマリー」では十分伝えきれなかった摂食に関する注意事項が、病院の嚥下担当医から正確に在宅医療チームに届き、在宅サービスの変更につながる場面がみられた。

6 苦労した点、うまくいかなかった点

アプリ iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」については、「口腔サポートセンター」がご本人やご家族と在宅チームをサポートしているが、当初の取り組みについて感情面を含めた調整が難しかった。特に管理する京都府歯科医師会の「口腔サポートセンター」の果たす役割が大きく、ご本人やご家族に対して管理栄養士や医療関係の面接技能にたけた職員のかかわりが重要になると考える。

7 これから在宅医療・介護連携に取り組む拠点に対するアドバイス

ITによる在宅医療連携においては、ご本人・ご家族の参加、病院担当医・NST・嚥下チームと在宅チームの連携が重要ではないか。特に、職種や立場によるコミュニケーションやギャップを克服するためには、「顔の見える関係」と共に、在宅イメージの共有や在宅医療チーム全体のイメージを各メンバーが持つことが大切であると考え。

今後は、このたびの在宅医療連携拠点事業にて得た貴重な経験やデータ等を京都府歯科医師会公衆衛生部で更に検討し、開発したアプリ iPad 版「きょうのごはん録」により、患家で撮影した動画や写真をタイムラインで Web 上に載せ、京都府歯科医師会に設置する「口腔支援センター」が管理し、多職種医療関係者は自宅や事業所、また診療所のパソコン上から情報を読みとり、在宅高齢者に対して迅速で適切な対応を行う等、患者のケアプランにも反映していきたい。

8 最後に

これからの在宅医療連携を考える上で、「顔の見える関係」を構築するための「新たな枠組み」や「新たな関係性」の創造が重要と考える。

その中で、今回開発したアプリ iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」は、「iPad」や「きょうのごはん録(ログ)」アプリ自体のアフォーダンスがトリガーとなり、

在宅医療チームやサービスの組織化が自ずと進むところを目撃した。

また、アプリ iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」のような「画像・動画発信」や「双方向性、ユビキタス性」を備えたコミュニケーション・ツールには、新しい「枠組み」と、それを支える「関係性」が生まれる可能性を感じた。

今後は今回開発したアプリ iPad 版「きょうのごはん録(ログ)」のバージョンアップを図り、平成25年度に京都府が継続事業として展開する「在宅食支援連携推進事業」に生かしていきたいと考えている。